

## ダニエル書 - 第37号

本来の真理の回復：ウィリアム・ミラーの夢の解明と終わりの時代における預言の再興

Jeff Pippenger

2024-01-01

ウィリアム・ミラーの夢は書『Early Writings』に収められており、したがって、真理の言葉を正しく解き明かそうとする学ぶ者に求められるのと同じ預言的な分析と適用の対象となる。この夢は長年にわたりFuture for Americaによって幾度も提示されてきたが、ここでは、それを1798年の「終わりの時」に開かれた「知識の増大」の研究に位置づけている。その夢は、増大した知識を表していたメッセージの歴史を扱っている。それは、第一天使と第三天使のメッセージの運動のあいだにある関連性を示している。

ウィリアム・ミラーの夢は彼の働きを指し示しており、彼の働きは古代イスラエルの初めにおけるモーセの働きによって型示されていた。終わりの時におけるミラーの夢の成就是、古代イスラエルの終わりの時におけるキリストの働きによって型示されていた。古代イスラエルの終わりにキリストが成し遂げた働きは、霊的イスラエルの終わりの時にキリストが成し遂げる働きを表していた。ミラーの夢では、終わりの時に成し遂げられる働きは「Dirt Brush Man」によって行われるものとして表されている。終わりの時における真夜中の叫びの成就の予告としてミラーの夢を認識することは不可欠である。また、古代イスラエルの終わりの時におけるキリストの働きが、ミラーの夢における「Dirt Brush Man」の働きを型示していたことを認識することも不可欠である。

キリストの働きについて注目すべき点の一つは、キリストがモーセの時代から埋もれていた真理の封印を解いただけでなく、同時にそれらの本来の真理をも高めたということである。こうして、終わりの時に神の民がミラーの夢を成就するとき、ミラーの働きを通して確立された諸真理は当初の理解を超えて拡大されるという模範を、キリストは示した。

救い主の時代において、ユダヤ人は、真理という尊い宝石を、伝統と作り話という瓦礫で覆い隠してしまい、真と偽を見分けることが不可能になっていた。救い主は、迷信と長年温存されてきた誤りという瓦礫を取り除き、神の言葉という宝石を真理という枠組みの中に据えるために来られた。もし救い主が、かつてユダヤ人のところに来られたように、今わたしたちのもとに来られるとしたら、何をされるだろうか。彼は、伝統や儀式という瓦礫を取り除くという、同様の働きをしなければならないだろう。彼がその働きをされたとき、ユダヤ人は大いに動揺した。彼らは神の本来の真理を見失っていたが、キリストはそれを再び明らかにされた。神の尊い真理を、迷信や誤りから解き放つことは、わたしたちに委ねられた務めである。なんとという大なる働きが福音においてわたしたちに託されていることだろう！ Review and Herald, 1889年6月4日。

今日、ちり払いの男（キリスト）は、ユダ族の獅子（キリスト）がユダヤ人の時代に成し遂げたのと同様に、「伝統と儀式のがらくたを取り除く」という同様の働きを成し遂

げている。ミラーの夢では、神の言葉の小箱に完全に並べられていた尊い真理の宝石が、がらくたや偽の宝石で覆われてしまった。これらの宝石は、終わりの日の真夜中の叫びの期間に、そのがらくたの中から取り出され、神の言葉のより大きな小箱に戻されることになっていた。というのも、ミラーがそのより大きな小箱の中の復元された宝石を見たとき、彼は「大いなる喜びで叫び、その叫びで」目を覚ましたからである。ミラーの夢は、第一の天使の真夜中の叫びから三年後の1847年に起こったので、夢の中での彼の目覚めは終わりの日の真夜中の叫びである。その真夜中の叫びは、底なしの淵から上ってきた獣に殺され、三日半のあいだ通りで死んでいた二人の証人によって告げ知らされる。彼らはやがて一つに形づくられ、死人の干からびた骨の谷で命を与えられ、そして旗印として掲げられる。ミラーの夢はあの通りで、そして彼が「自分の部屋」と呼ぶ同じ谷で成就する。

ミラー派の歴史において、ミラーは主によって用いられ、アドベンチズムの原初の真理を確立したが、彼の夢は、時の経過とともにそれらの真理が埋もれてしまうことを示していた。伝統や慣習の塵芥を払いのけるというこの現象は、古代イスラエルの終わりにキリストが成し遂げたことであり、そのことによって彼はウィリアム・ミラーの夢の最終的な成就を型として示した。

ユダヤ人は「神の本来の真理を見失っていたが、キリストはそれを再び明らかにされた」。そしてキリストは、ご自身の働きを「私たちの働き」と見なした。私たちの働きは「神の尊い真理を迷信と誤りから解き放つ」ことである。ウィリアム・ミラーの夢は、本来の真理の発見、提示と拒絶、そして回復を指し示している。回復の働きを成し遂げるために、キリストは真理を「真理の枠組み」の中に置いた。ウィリアム・ミラーにとっての「真理の枠組み」とは、異教と教皇制という二つの荒廃の力についての理解であった。終わりの日々における「真理の枠組み」は、竜、獣、偽預言者という三つの荒廃の力である。

「キリストが真の宗教を体現し、人の心と行為を支配すべき原則を高く掲げるためにこの世に来られたとき、偽りは、かつて大いなる光を与えられていた者たちにすでに深く根を下ろしており、彼らはもはやその光を理解せず、真理のために伝統を手放さうという気もなかった。彼らは天の教師を退け、栄光の主を十字架につけてまで、自分たちの慣習や考案物を保とうとした。同じ精神が今日の世界にも現れている。人々は、自分たちの伝統が乱され、新しい秩序がもたらされるのを恐れて、真理を調べることを嫌う。人類には常に誤る危険がつきまとい、人は本来、人間の考えや知識をことさらに高く掲げがちである一方で、神的で永遠なものは見分けもされず、尊重もされない。」『安息日学校の働きに関する勧告』、47。

もし今日キリストがこの世に来られるなら、人間の思想や知識を高く掲げ、真理の代わりに伝統を据えた「まったく同じ精神」を見出されるだろう。ミラーの夢では、終わりの日に、キリストはちり払いの男として来て、その同じ働きを成し遂げる。ちり払いの男としての働きが成し遂げられると、ミラーに象徴される二人の証人が大声の叫びで目覚めるとともに、元の宝石は太陽の十倍も明るく輝く。

Millerに与えられた真理の枠組みは、二つの荒廃させる勢力の預言的構造であり、Future for Americaに与えられた真理の枠組みは、三つの荒廃させる勢力の預言的構造である。小箱に付けられていた「鍵」とは、封印が解かれてMillerに与えられ、その後Future

for Americaにも与えられた特定の方法論のことであった。

キリストの時代、旧約聖書に記された知恵の宝庫を開くために本来それを握っているべき人々によって、知識の鍵は取り上げられていた。ラビや教師たちは、貧しい者や苦しむ者から事実上天の御国の門を閉ざし、彼らを滅びに任せた。キリストは説教において、一度に多くの事柄を持ち出して彼らの心を混乱させることのないようにされた。彼は一つひとつの要点を明確に、はっきりと示された。思想を教え込むという目的にかなうのであれば、彼は預言における古くなじみの真理の繰り返しを軽んじはしなかった。

キリストは、古来の真理の珠玉のすべての源であられた。ところが、敵の働きによって、これらの真理はその位置を奪われ、本来の位置から切り離され、誤りの枠組みに組み込まれてしまっていた。キリストの御業は、これらの尊い珠玉を真理の枠組みの中に再び整え、確固として据えることであった。ご自身が世を祝福するためにお与えになった真理の原則は、サタンの働きによって埋もれ、見かけ上は絶えてしまっていた。キリストはそれらを誤りの瓦礫の中から救い出し、新たな生命力を与え、尊い宝石として輝き、永遠に堅く立つよう命じた。

キリストご自身は、これらの古い真理のいずれも、微塵たりとも借りることなく用いることができた。というのも、それらはすべて、もともとキリストから出たものだからである。彼はそれらをあらゆる時代の人々の心と思いの中に植え付けてこられ、そしてこの世に来られたときには、形骸化していた真理を再構成して生気を与え、後の世代の益のために、いっそう力強いものとなさった。がらくたの中から真理を救い出し、元の新鮮さと力をも上回るものとして再び世界にお与えになったのは、イエス・キリストであった。『Manuscript Releases』第13巻、240、241ページ。

最後の一節で興味深いのは、古代イスラエルの終わりにキリストが用いた鍵が旧約聖書を開くものであったという点である。ミラーの方法論の鍵は旧約・新約聖書の箱を開いたが、終わりの時、彼の夢の結末では、その箱はより大きい。終末の方法論の鍵は、旧約・新約聖書だけでなく、預言の霊も開く。恩恵期間が閉じる直前におけるイエス・キリストの黙示の封印の解除は、ユダ族の獅子によって成し遂げられ、そのユダ族の獅子はミラーの夢ではちり払いの男として表されている。シスター・ホワイトは、ちり払いの男の働きが恩恵期間の閉じる直前に起こることを示している。

主は1月26日に私に一つの幻を与えられた。ここにそれを述べる。私は、神の民の中には愚鈍で眠り込んでいる者がいて、半ば目を覚ましているにすぎず、私たちが今どのような時に生きているのかを悟っていないのを見た。また、「塵払いの刷毛」を持った「男」が入り込んでおり、何人かは掃き払われてしまう危険にさらされていることも見た。私はイエスに、彼らを救い、もうしばらくの間彼らに猶予を与え、彼らに自分たちの恐るべき危険を見させ、永遠に手遅れになってしまう前に備えができるようにしてくださるよう、懇願した。天使は言った、「滅びは激しいつむじ風のようにやって来る。」私は天使に、この世を愛し、自分の財産に執着し、それらから手を切つて、霊的な食物の欠乏のために滅びつつある飢えた羊を養うために遣わされる使者たちの道を急がせるために、それらをささげようとする者たちを、あわれみ、救ってくださるようにと願った。

私は、現在の真理を欠いて死にゆく哀れな魂たちを見、また、真理を信じると公言する者の中に、神の働きを進めるために必要な手段を差し控えることによって彼らを死なせている者もいるのを見た。その光景はあまりにも痛ましく、私は天使に、それを私から取り去ってくださるよう懇願した。私は、神の大義が彼らの財産の一部を求めると、イエスのもとに来た若者のように〔マタイ 19:16-22.〕彼らが悲しみながら去っていくのを見た。やがて押し寄せる災禍が通り過ぎ、彼らの所有物をことごとく一掃してしまい、そのときには、地上の財を犠牲にして天に宝を積むには遅すぎるであろうことも見た。レビュー・アンド・ヘラルド、1850年4月1日。

「押し寄せる災厄」は、間もなく来る日曜法の象徴であり、ミラーの夢に登場するちり払いの男の働きは、恩恵期間が閉じる直前に行われる。彼が部屋をきれいにし終えたとき、彼は宝石をさらに大きな箱に戻し、それらは太陽より十倍も明るく輝いた。ダニエルとその三人の友は、ほかの者たちより十倍優れていると認められた。

さて、王が彼らを引見させるよう定めた日々が満ちたとき、宦官長は彼らをネブカドネザルの前に連れて来た。王は彼らと語り合い、彼らの中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに並ぶ者が一人もいないことが分かった。こうして彼らは王に仕える身となった。また、王が彼らに尋ねた知恵と理解に関するすべての事柄において、彼らは王国中のすべての魔術師や占星術師よりも十倍も優れていると認められた。ダニエル書 1:18-20。

「日数の終わり」は、ダニエルにとって、ネブカドネザルが判定を下した試験の時を示しており、その試験は終末の時代の「日曜法」を象徴している。元来の基礎的な真理は、最初に認められたときよりも、終末の時代に回復されるときの方が十倍も明るく輝く。終末の時代にその真理を悟る賢い者たちも、その真理も、「真夜中の叫び」の繰り返しである「後の雨」の期間には十倍も輝く。

「あなたがたは主の再臨をあまりにも先のことと考えすぎている。私は、後の雨が真夜中の叫びのように〔突然に〕降り、その力は十倍であったのを見た。」 Spalding and Magan, 5.

本来の真理の回復は、「一行一行」という後の雨の方法論を適用することによって成し遂げられる。ひとたび回復されると、その本来の真理は、ミラーが最初にそれらに目を注いだときよりも「十倍」明るく輝く。本来の真理を回復するために方法論という鍵を用いる賢い者は、バビロンの方法論を食べる者たちよりも「十倍」優れた経験を得る。ちり払いの男に掃き払われる者たちは、本来の真理を覆い隠してきた伝統や慣習に執着し、その執着した伝統と慣習の誤りとともにふるい落とされる者たちである。

偽りの教理は偶像である。

真理を退けると、人はその作者をも退ける。神の律法を踏みにじることにより、彼らは律法の制定者の権威を否定する。偽りの教義や理論を偶像とすることは、木や石で偶像を造るのと同じくらい容易である。

エフライムに対して、その猶予期間の終結を示した宣告は、床を掃くときにちり刷毛を持った男が成すことの正しさを強調している。

エフライムは偶像に結びついている。彼を放っておけ。ホセア書 4:17.

人は食べるものでできているということは、ダニエルと三人の勇士によって実証されている。「愚かで眠り込んでいる」人々に対するホワイト姉妹の懸念は、彼らの備えの欠如と、「現在の真理」の重要性に対する識別力の欠如に関するものだった。彼女の懸念は、本来の真理を完全に見失っていた当時の些細なことと言い争うユダヤ人に対するキリストの憂慮の表れであった。ミラーの夢は、古代の文字通りのイスラエルによって予表されてきた現代の霊的イスラエルの終わりを指し示している。

律法学者とパリサイ人は聖書を解き明かすと称していたが、彼らは自分たちの考えや伝統に従って解釈していた。彼らのしきたりや戒めは、ますます厳格なものになっていった。霊的な意味においては、聖なる御言葉は人々にとって封印された書のように、彼らの理解には閉ざされたものとなった。Signs of the Times, 1905年5月17日。

1863年以来、ラオデキア的アドベンチズムには次第に深まる暗闇が覆いかぶさり、聖書と預言の霊は彼らにとって封印された書のようなものとなった。恩恵期間が閉じる直前にイエス・キリストの啓示の封印が解かれ、それによって三段階の試練の過程が生じ、慣習と伝統という偶像を手放すことを拒む者たちが間もなく到来する日曜法の時に一掃されることで終わりを迎える。

私たちには無限の贖い主がおられ、これを神の御言葉のうちに証しする真理の珠玉がなんと尊いことでしょう。しかし、これらの尊い珠玉は、サタン自身が生み出した塵芥や人間の伝統、異端の堆積物の下に埋もれてしまっている。彼の策略は不思議な力をもって人の心に働き、彼を信じる者たちにとってのキリストの価値をかすませている。神と人との敵は、キリストの弟子であると公言する者たちを呪縛し、多くの者については「彼らは自分たちの顧みられる時を知らない」と言えるほどである。レビュー・アンド・ヘラルド、1898年8月16日。

ミラーの夢は、「本来の真理」が確立され、その後には退けられ、そして最終的に回復されるという歴史を示している。恩恵期間が閉じられる直前に「塵払いの男」が場面に現れ、本来の真理を再確立し、それらを「十倍」も明るく輝かせる。これは真夜中の叫びの歴史の中で起こることであり、真夜中の叫びは、日曜法における第三天使の大いなる叫びに先立つ。真夜中の叫びは、ミラー派の歴史において調査審判の開始に先行したのと同様に、日曜法に先立って乙女たちを目覚めさせ、より分ける。宝石が、より大きく回復された箱に投げ戻されるときには、すでに手遅れである。というのも、その出来事は、床がすっかり掃き清められた「後」に起こるからである。

「誤りの塵と瓦礫が真理の尊い宝石を埋もれさせてきたが、主の働き人たちはこれらの宝を掘り起こすことができる。そうして数千の人々が、それらを喜びと畏れをもって仰ぎ見るようになる。神の御使いたちはへりくだった働き人のそばにあって、恵みと神の啓きを与え、そして数千の人々がダビデとともに『あなたの律法のうちにある驚くべきことを見るために、私の目を開いてください』と祈るように導かれる。長い時代にわたって見えもせず顧みられもしなかった真理が、神の聖なるみ言葉の光に照らされたページから、炎のように輝き出るだろう。一般に、真理を聞き、拒み、それを踏みにしてきた諸教会は、なおいっそう邪悪にふるまうだろう。しかし『賢い者』、すなわち正直な者たちは悟る。その書は開かれており、神の言葉は、御心を知る

ことを願う者たちの心に届く。天から来て第三の天使に加わる天使の大いなる叫びによって、数千の人々が、世を長きにわたりとらえてきたまどろみから目を覚まし、真理の美しさと価値を見るだろう。」レビュー・アンド・ヘラルド、1885年12月15日。

そのとき目覚める「数千人」は、いまだバビロンにいる神の別の群れを表している。というのは、「大声の叫び」は日曜法のとくに始まるからである。「ほこり払いの男」の働きは2001年9月11日以来続いており、2023年7月以降はいっそう顕著である。

使徒は言う、「聖書はすべて神の靈感によって与えられ、教え、戒め、矯正、義にかなう訓練のために有益である。それは、神の人が完全な者となり、あらゆる良いわざのために十分に整えられるためである。」聖書は自らを解き明かす。ある聖句がほかの聖句を開く鍵となり、このようにして聖書のことばの隠された意味に光が当てられる。同じ主題を扱うさまざまな箇所を比較し、それらの関わりをあらゆる側面から検討することによって、聖書の真意が明らかになる。

多くの人は、神の御言葉の意味を理解するためには聖書の注解書を参照しなければならないと考えている。私たちは、注解書を学ぶべきではないという立場を取るものではない。だが、人間の言葉の山に埋もれた神の真理を見いだすには、多大な識別力が必要である。聖書を信じると公言する団体としての教会が、神の御言葉の散らばった宝玉を集めて、一つの完全な真理の鎖へとつなぎ合わせるために、どれほどわずかなことしかしてこなかったことか。多くの人が思うように、真理の宝は表面に横たわっているのではない。悪の陣営の首謀者は、真理を人の目から隠し、偉大な人々の意見を全面に押し出すために、絶えず働いている。敵は、教育の過程を通して天の光を曇らせるために、できる限りのことをしている。というのも、彼は、人々が「これが道だ。この中を歩め」と語る主の声を聞くことがないようにしようとしているからである。

真理の宝玉は啓示の野に散らばっている。しかしそれらは人間の伝統、人の言葉と戒めの下に埋もれ、天からの知恵は事実上無視されてきた。というのも、サタンは、人間の言葉と業績こそが重大であると世に信じ込ませることに成功したからである。諸世界の創造主であられる主なる神は、はかり知れない代価を払って福音をこの世にお与えになった。この神の手段を通して、天の慰めと常しえの慰藉の、喜ばしくさわやかな泉が、いのちの泉に来る者たちのために開かれている。まだ発見されていない真理の鉱脈がある。しかし霊的な事柄は霊的に見分けられる。悪によって曇らされた心は、イエスにある真理そのものの価値を理解することができない。Review and Herald, 1891年12月1日。

ミラーの夢において「塵払いの男」として表されているキリストの働きには、二つの側面がある。それは、誤りを取り除き、元来の諸真理を回復することである。誤りの除去にもまた二つの側面がある。というのは、誤りが窓の外へ掃き出されるとき、その誤りは、誤りに執着することを選ぶ者たちをも道連れにするからである。塵払いの男によって成し遂げられる分離の業についてはエレミヤも取り上げており、その証言はシスター・ホワイトの言葉と一致している。彼女はこう述べている。「主の働き人たちはこれらの宝を掘り起こすことができ、そうして何千人もの人々が喜びと畏敬の念をもってそれらを仰ぎ見るようになる。」

それゆえ、主はこう言われる。「もしあなたが立ち帰るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しいものから尊いものをより分けるなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らはあなたのもとに立ち帰るがよい。しかし、あなたは彼らのもとへは戻ってはならない。」エレミヤ書15章19節

エレミヤ書その箇所文脈は、2020年7月18日の第一の失望を経験した者たちに向けられている。尊いものと卑しいものをより分けるのは単に「Dirt Brush Man」だけではなく、主のもとに立ち戻るか否かを決断する者として描かれているエレミヤに象徴される人々の働きでもある。彼らは明らかに主と共にいなかった。もし主と共に歩んでいたなら、立ち返る理由はないからである。彼らが立ち返って主の前に立ち、その後主の口となる時、彼らは尊いものと卑しいものを分ける働きを成し遂げることになる。「Dirt Brush Man」の働きには、賢い者たちの参加が求められる。ミラーの夢における「Dirt Brush Man」の働きは、キリストが精錬の過程を通してご自身の打ち場を清められるときにも例証されている。

「この精錬の過程がいつ始まるのか私には言えないが、長くは先延ばしにされない。手にふるいを持っておられる方は、その神殿を道徳的な汚れから清められる。彼はご自身の打ち場を徹底的に清められる。」Testimonies to Ministers, 372, 373.

最後の「精錬の過程」は2023年7月に始まり、それはマラキ書第3章の精錬の過程です。

マラキ書3章1-4節が引用された。

神の民の間では、精錬と清めの過程が進められており、万軍の主ご自身がこの御業に取りかかっておられる。この過程は魂にとってきわめて厳しいものだが、汚れが取り除かれるために必要である。私たちが御心に服して天の父に近づき、主に義のささげ物をささげることができるようになるために、試練は不可欠である。神が魂を精錬し清める御業は、主のしもべたちが徹底してへりくだり、自己に死に、実際の奉仕に召されるとき、ただ神の栄光だけに目を注ぐ者となるまで、続けられなければならない。Review and Herald, 1894年4月10日

ミラーの第二の夢は、本来の真理の回復と、散らされていた民の同時の回復を示している。ネブカドネザルの第二の夢は、彼の王国の回復を示している。ミラーの夢は、本来の真理が「散らされる」という表現で、その真理が埋もれさせられることを扱っている。「散らされる」という語は、「七つの時」の象徴である。ネブカドネザルの夢は、「七つの時」における「散らされること」についてのものである。ネブカドネザルは1798年の「終わりの時」に置かれ、そこで回心した人を表している。ミラーは1798年における「賢い者」の象徴である。

ミラーの夢の続きは次回の記事で。

私たちが他者と意見を異にせざるを得ないとき、または他者が私たちの意見と異なることを表明するときには、私たちはキリストの精神を示し、真理は検証に耐えるのだから、私たちには静かに公正でいられる余裕があるという事実を明確に示すべきである。真理は学ばれば学ばれるほど、その光はいよいよ輝きを放つ。主は、苛烈さや過

度の厳しさを感じさせるものすべてに眉をひそめ、自分と意見を異にする者を軽蔑し非難して、できる限り悪い印象に見せかける者たちに叱責を下される。天はこのような者たちを、かつてパリサイ人を見たのと同じ目で見、彼らを聖書にも神の力にも無知であると宣言する。真理の敵は、真理を誤りに変えることはできない。彼らは真理を踏みにじり、打ち倒して瓦礫で覆い隠したのだから勝ったのだと考えるかもしれないが、神はご自身の忠実な者たちのうちの何人かを動かして、キリストが地上におられたときにされたように、瓦礫を払いのけ、真理の枠組みの中で真理を本来の位置に戻させる。

真理が議論の対象になっている集まりでは、自分たちが真理として受け入れてこなかったものすべてに反対する者がいるだろう。しかも彼らは、自分たちは誤りと戦っているだけだと自惚れながらも、語られることを歪曲したり誤解したりしないために、偏見のない耳で聞き、何が真理であるかを理解する必要がある。彼らの目の前には、あらゆる時代に真理に敵対し、その結果、自分たちに不利となるように神の評議（原文ママ）を退けた人々の前例がある。大いなる光と大いなる機会を与えられながらも、なお主の側に全く立つことに失敗してきた人々の上には、重い責任がのしかかるだろう。もし彼らが思い切って全く主の側に立つなら、たとえ一人で立つことを求められる時であっても、誠実さのうちに守られるだろう。主は彼らが、純潔と公正のうちに、汚されていない義の原則のために戦い、勇敢に立つことができるようにしてくださる。たとえ正義が街路に倒れ、公平が入れないとしても、ただそれが正しいからという理由で正しさのために戦う彼らを、主は支えてくださる。彼らは、何が純粋で汚れなく、キリストの生涯に則しているのかを悟り、無知に対してだけでなく、教養と経験を備え、詭弁の武器を用いて彼らを黙らせようとする者たちに相対するとしても、霊においても言葉においても行いにおいても、キリスト教の最も純粋な原則から遠くことはないだろう。誤りが真理に敵対するこの一連の争いを通して、彼らは守られ、敵が反駁も抵抗もできないような歩みを保てるようにされるだろう。彼らは原則に関して岩のように揺るがずに立ち、誰とも妥協することを拒みつつ、それでもなお、すべてのクリスチャンにふさわしい精神を保つだろう。

キリストに従う者は、聖と俗をわきまえ、人の品性と働きについての確かな証拠を重んじる。なぜなら、キリストは「その実によってあなたがたは彼らを知るであろう」と言われたからである。キリスト者は、あらゆる種類の反対のただ中であっても前進していく。彼は、へつらいがサタンの所産であるゆえに、それを軽蔑する。彼は、非難が悪しき者の武器であるゆえに、それを忌み嫌う。彼らは、嫉妬を心に抱いたり、自己高揚にふけったりはしない。これらは神と人との敵の特徴だからである。彼らは密偵として見いだされることはない。というのも、イエスに敵対するこの働きにおいて、サタンは蔑まれていたユダヤ人を用いたからである。彼らは、ユダヤ人がキリストの言葉じりをとらえてからめとろうとし、ひと言をとがめて罪に落とし入れるために多くのことを語らせようとしながら付きまとったように、兄弟たちに質問攻めで付きまとうことはない。ホーム・ミッショナリー、1894年9月1日。